大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ゴットフリート・ケラーの『失われた笑い』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷口, 栄一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017632

ゴットフリート・ケラーの『失われた笑い』について

谷　口　栄　一

０．はじめに

ゴットフリート・ケラーの短篇小説集『ゼルトヴィーラの人々　第二部』には５つの作品が収録されているが、そのうちで最後に完成し、最も分量が多いのが『失われた笑い』（1874年）である。元来は『合唱祭』もしくは『祭りのスイス人』というタイトルで、「日常生活では必要とされない道化じみたお祭り好きの男」を描く短篇を構想していたのであったが、執筆の途中で同時代の社会に対する問題意識を急激に強め、『ゼルトヴィーラの人々』の最後を飾るのは、時代の抱える病弊の実相に迫るアクチュアルな作品であるべきだと考えるに至ったのである[1]。1873年初頭には現在のタイトルに改まっており[2]、原型を活かしながらも、同時代の政治・経済・宗教の問題を単なる背景以上のものとして扱い、社会小説的な色彩を帯びた、かなり長めの短篇小説として完成することになった。『ゼルトヴィーラの人々』に収められた他の短篇よりもむしろ、最晩年の作品である長篇小説『マルティン・ザーランダー』（1886年）との間に多くの共通点を見いだすことができるのである。

１．笑い

本作品に盛り込まれた情報量の多さにもかかわらず、筋の展開が整然とした正統派のノヴェレという印象を決定的なものにしているのは、タイトルにもなっている「笑い（Lachen）」にほかならない。「笑い」とはユクンドゥスとユスティーネの微笑であり、「微笑む（lächeln）」という動詞も併用されている。まず作品冒頭で、ゼルトヴィーラの合唱団の先頭に立って合唱祭の会場へ向かう途中の旗手ユクンドゥスが「微笑みながら振り返る」[3]。そして合唱祭の表彰式、すなわちユクンドゥスとユスティーネの初対面の場面で、お互いに相手の笑いに自分自身との共通性を認識して顔を赤らめるのである。この微笑は決して作り笑いなどではなく、天性の無邪気なものとして描写されている[4]。官能的な魅力を持つものでもある。笑いは本能的なものであり、束縛のない自由な精神状態を意味する。同じ笑いを持つことは、この二人の男

ケラーの作品からの引用はすべてGottfried Keller: Sämtliche Werke in 2 Bänden. München（Droemer）1954. を使用し、以下の註釈においてはSWと表記している。

[1] Vgl. Ursula Amrein（Hg.）: Gottfried Keller – Handbuch. Leben – Werk – Wirkung.Stuttgart（Metzler）2016, S.81; Ulrich Kittstein : Gottfried Keller. Stuttgart 2008, S.132.

[2] Vgl. Ursula Amrein（Hg.）:a.a.O.

[3] SW Bd.1 S. 960.

[4] Vgl. SW Bd.1 S. 962.

女の宿命的な結びつきを暗示するものである。ユクンドゥスの母マイエンタール夫人もユスティーネを初めて見たとき、「自分の息子のそれと同じユスティーネの優美な微笑」に驚き、「不可思議な自然の戯れ、この紛れのない運命の意思表示」[5] を読み取るのであった。二人は結婚することになる。第１章の末尾の一文には「この上なく澄みきった朝の空が彼らの婚約時代に微笑んでいた（lachte）」[6] とあり、意味深長な表現である。二人だけではなく、空（天）も笑っているのであり、二人の結婚は自然秩序にかない、根源的に祝福されるものであることを示している。併し単にそれだけならばこの表現を用いる必然性はなく、これから起こる波乱を暗示する「婚約時代をあざ笑っていた」という裏の意味がこめられていることは間違いない。

笑いが失われるとすれば、それは社会規範による阻害のためである[7]。ユクンドゥスが故郷ゼルトヴィーラで始めた商売は、彼のあまりの人の好さのゆえに次第に左前になり、ついに資金が底をついたことを妻に打ち明けた時、妻は平然として「彼の心が晴れるほどに美しく微笑みかけた」[8] のであった。ユスティーネはユクンドゥスに対し、廃業した上で、彼女と一緒にシュヴァーナウに移住し、彼女の実家グローア家に従属することを強要する。実家に里帰りできることを喜ぶユスティーネに対し、屈辱を感じながら事業を清算し、地所やオークの大樹を売却するユクンドゥスが浮かべるのは「憂鬱そうな微笑」[9] である。もはや「同じ笑いを持つ二人」ではなくなっている。併しシュヴァーナウに移転後、ユクンドゥスはグローア家先祖代々の山上の百姓屋敷に住むユスティーネの祖父母とばかり親しく交わって百姓仕事を手伝い、彼らにとってなくてはならない存在になっていた。ユスティーネは、自分の祖父母のもとで夫が信望を得たことを嬉しく思って「幸福に満ちた笑みをうかべ」[10]、ユクンドゥスもユスティーネの祖母と「笑いながら」[11] 宗教談義を交わしている。ところがこのような和やかな時間は長く続かなかった。グローア家の若い世代、すなわち平地の邸宅に住むユスティーネの両親や兄たちは、ユクンドゥスに農作業の手伝いを期待していたのではなかった。グローア家は30年以上前から絹織物工業を営み、業績を伸ばし、経営規模を拡大していた。彼らはユクンドゥスにもこの事業に従事し、経営陣の一角を担えるようになってほしいと望んでいたのである。平地の邸宅に隣接する事業所に連れていかれ、ユクンドゥスはさまざまな部門の仕事を順に教わり、いわば試験を受けなければならなかったのである。その結果は不合格であった。どの部門においても無能と見なされ、実際にわずか半年足らずの間に会社に著しい損失をもたら

---

[5] SW Bd.1 S. 967.
[6] SW Bd.1 S. 972.
[7] Vgl. Caroline von Loewenich : Gottfried Keller: Frauenbild und Frauengestalten im erzählerischen Werk. Würzburg 2000, S.124.
[8] SW Bd.1 S. 976.
[9] SW Bd.1 S. 978.
[10] SW Bd.1 S. 980.
[11] SW Bd.1 S. 982.

してしまうことになる。ユスティーネもまた実業家グローア家の一員であり、両親や兄たちと価値観を共有しており、今や夫の職業的能力に対する彼女の期待と信頼は完全に失われてしまった。当然のことながら夫のプライドはずたずたに引き裂かれており、ユクンドゥスの顔からはすでに笑いが完全に消えてしまっていた。

ユクンドゥスがグローア家の事業から手を引くことを余儀なくされたのと同じ日に、もう1つの不幸な出来事が起こる。ユスティーネはシュヴァーナウの教会の野心的な改革派の牧師が主導するサークル―それはほとんど新興宗教の教団と言ってもよいようなものだった―に狂信的に帰依していた。一方ユクンドゥスはまぎれもない無神論者であったが、他者の自由と権利を尊重する考えから、攻撃的になることはなく、無関心な態度をとり続けていた。ところがこの日は晩遅く牧師館まで妻を迎えに行くことになり、宗教に冷淡なユクンドゥスのことを快く思っていなかった牧師から挑発を受けた時、彼は絶対的な誠実さのゆえに自らの信念を偽ることができず、牧師に真っ向から反論する。ユスティーネにとって宗教活動は、さっぱりうだつの上がらない夫をめぐる憂鬱を忘れさせてくれる生き甲斐のようなものだったのである。あるいは夫を信仰に目覚めさせたいという願望すら抱いていたように思われる。ユスティーネは帰り道で「夫の腕を放し、忍び泣きながら、よろめくように夫の傍らを歩くのだった。」[12] ユクンドゥスはユクンドゥスで、別のことで頭がいっぱいだった。帰宅後、彼は自分にとって居場所のないグローア家を離れて、ユスティーネとともに首都に出て自立したいと打ち明ける。「もし君が当初のためのいくらかの資金を、たとえば教会での礼拝や他の大好きなことのために君がこれまで支出してきたのと同じ程度でよいのだが、君の両親からもらってきてくれれば、僕としては将来の不安はないのだが」[13] という余計な一言まで口にした。これを聞いたユスティーネは怒りを爆発させ、「あなたはどこへなりと行きたいところへ行ってしまうがいいわ。私はあなたにはついていきません」[14] と夫を罵倒する。そして「この瞬間からこの二人の夫婦の顔からはあの優美で幸せそうな笑いが、まるでそんなものはあったためしがないかのように、完全に消えてしまった」[15] のであった。ユクンドゥスは首都へ向かう暗い馬車の中で、ユスティーネが初めて彼に笑いかけた時の美しい顔を思い出す。「あの微笑は、まさにそのようにできていて、違ったふうにはできていない筋肉のなせるわざなのだ。小さな軽い切り傷でそれを切断してしまえば、全ては永遠に消えてしまうのだ」[16] とつぶやくユクンドゥスは、結局のところ二人が本当の意味での夫婦となりきれていなかったことを認めているのである。ユスティーネもまたその夜は一睡もせず、明け方には鏡の前で「消え失せた幸福の美しい悪夢を

---

[12] SW Bd.1 S. 994.
[13] Ebenda.
[14] SW Bd.1 S. 995.
[15] Ebenda.
[16] Ebenda.

苦笑しようとした」が、「彼女の口も両頬も大理石のように固くこわばって動かなかった」[17] のであった。激しく動揺するものの、彼女にも離別は不可避なものとしか考えられないのである。

作品第３章で、別居した夫婦はそれぞれの試練を経験する。そしてその試練の中で、二人は互いに相手を求めるようになっていく。ユクンドゥスは首都で転職に成功する一方、相変わらずの軽信で、本質を見抜けないままに政治改革運動に身を投じる。やがて運動のいかがわしさに気づき、真相をつきとめようと決意する。ユスティーネは恐慌によってグローア家の事業が破産寸前に追い込まれる危機を経験し、夫に再会したいという希望を抱くようになり、首都に出て教員になりたいと望む。助言と仲介を求めてシュヴァーナウの牧師のもとに赴くが、この牧師が実はユクンドゥスの反論が正しかったことを認めずにはおれなくなり、牧師を辞めようとして投資を始め、恐慌のために財産を全て失ってしまったことを知る。ユスティーネは心の拠り所を求めて、巡礼の老婆に憧れ、また独特な信心家であった旧知の未亡人とその娘を訪ねていくことになる。第４章（最終章）で、ユクンドゥスとユスティーネはそれぞれの試練をひとまず乗り越え、運命的な再会を果たす。併し再会の直後には「笑い」はまだもどってきていない。お互いの心中を探りながら、「二人は終始ひどく真剣な面持ちで並んで歩いて行った」[18] のであり、完全な和解には到達していない。翌日の日曜日に、二人はユスティーネの祖父母の住む山の上で待ち合わせの約束をしている。二人は互いに相手が急ぎ足で近づいてくることに気づき、相手の愛と誠実さが確かめられたことで、「失われていた笑いが二人の顔に戻った。二人は抱擁し、心からの接吻を交わした」[19] のである。ユクンドゥスとユスティーネはこの結末の場面で、冗談を言い合って、明るく陽気にふるまっている。笑いを取り戻したというだけにとどまらず、ここにおいてはじめて、二人はあらゆる迷妄や束縛から解放され、心の底から理解し合う者同士に、そして真の意味での夫婦になることができているのである。祖父母の家には、グローア家の全員が集まって、二人を祝福することになる。自然的本能的なものであった彼らの笑いを失わせたのは、結局のところ、宗教も含めた社会規範であり、社会的現実だったのである。

２．森林伐採

本作品と最晩年の長篇小説『マルティン・ザーランダー』との共通点の多さについては、冒頭で述べた通りである。その中でも特に印象深いのが、森林伐採を題材として取りあげていることである。実際に19世紀のスイスにおいて森林は大規模に皆伐され、木材がライン川を下って、オランダやイギリスに大量に輸出されていたという。1870年のスイスの森林面積は現在の

---

[17] Ebenda.
[18] SW Bd.1 S. 1024.
[19] SW Bd.1 S. 1025.

63%にまで減少しており、1876年に森林の保護を目的とした山岳地域森林警察法が制定され[20]、1897年にはスイス憲法においても、森林の維持のための規則を定めることが明文化されている[21]。森林伐採は当時のスイスにおいてまぎれもなく大きな社会問題の一つであった。

ユクンドゥスは結婚と同時に軍人の道を断念し、ゼルトヴィーラとその周辺地域の豊富な木材を外国に輸出する商売を起こしていた。木材の需要が増大し、森林開発の波が押し寄せる中、ゼルトヴィーラの人々にとっては地元出身の信頼できる仲介業者の誕生はありがたく、ユクンドゥスの事業は活況を呈していた。併し山の斜面は次第に禿げ、森林破壊が進んでゆく。子供の頃から森に親しみ、森を愛していたユクンドゥスは、自分がこうした商売で収益を上げていることを恥ずかしく思い、また悲しまずにはおれなかった。この苦しみを彼は妻ユスティーネに打ち明ける。併し成功した実業家の娘ユスティーネは「夫がやがて自力で裕福になり、一本立ちし、こうした面からも夫を誇りに思えるようになることだけを念じていた。それゆえ彼女は、夫の嫌気をこれ以上強めてしまうようなことは言わず、むしろ辛抱するよう励ますのだった。」[22] 雑木林が次々と伐採されてゆく中で、最後まで残っていた樹齢数千年と推測される１本のオークの美しい巨木を、ユクンドゥスは公共財として町で管理することを提案するが、耳を貸す者はいない。国家に買い取って保存してもらおうと、ユクンドゥスは政府に嘆願したのであったが、却下されることになる。昨今の議論にも通じる地球環境問題と資本主義をめぐる根源的な問いが明示されている。

本作品においてこのオークの巨木は、パウル・ハイゼのノヴェレ理論で言うところの「鷹」に相当する。ユクンドゥスはオークの巨木とそれが立っている周囲の地面だけを自ら買い取って、この巨木を救う。彼の価値観がこの時代の市民たちの社会規範とは相いれないことを象徴する出来事である。この時以来商人仲間の彼に対する態度が一変するが、そこには二重の意味があった。一つは商売人たちの規範を否定する人間に対する敵意と制裁の意味であり、もう一つは彼が騙されやすいお人好しであることが際立つようになり、利己主義者たちは彼に対して詐欺をはたらくことに良心の痛みを感じることがなくなったことを意味する。ユクンドゥスはついに「木を殺戮する仕事」[23] である材木商をやめて、業種を大きく転換し、石炭や褐炭、土管や鉄管、煉瓦やセメントを商うようになる。併し弱肉強食の時代を実業家として生き抜くしたたかさを持たない上に、軽信のゆえに取引先から騙され続けた彼は、結局のところ商売替えにも成功せず、資金が底をついて廃業を余儀なくされた。オークの巨樹も土地とともに売り払うしかなかったのである。オークの巨木はユクンドゥスの置かれた状況を象徴している。誠実

---

[20] 志賀和人：スイスにおける地域森林管理と森林経営の基礎構造（『林業経済』第56巻第6号）2003年、2頁参照
[21] 森田安一・踊共二［編］：スイス（河出書房新社）131頁
[22] SW Bd.1 S. 974.
[23] SW Bd.1 S. 975.

なユクンドゥスはもともと故郷ゼルトヴィーラにおいて信頼され尊敬される存在であったが、ゼルトヴィーラにも利己的な拝金主義が支配するようになり、実直さを捨てられないユクンドゥスは孤立する。作品第２章の終わりでオークの木が根こそぎに倒されるのと同時に、ユクンドゥスも故郷ゼルトヴィーラを離れていかなければならなくなるのである。

そして最終章におけるユクンドゥスとユスティーネの和解の場面に注目する必要がある。失われた笑いが戻った二人は、「広々とした森の空き地の端に立っていて、その中には手入れのよく行き届いた苗木畑があった。（中略）この苗木畑は農業協同組合のものにすぎなかったのであるが、まるで貴族の庭園のようにずいぶんと入念かつ優美に手入れされていた。もはや自分自身の生活のためではなく、来るべき世紀のため、孫や曾孫のためになされている愛情のこもった配慮を目の当たりにして惹き起こされた、不意の驚きの印象を、荘重な静寂が一層高めているのであった。」[24] 夫婦の和解と重ね合わせる形で、拝金主義による森林破壊の解決策がこのように明示されていることは、森林の乱伐がいまなお地球規模で問題になっている21世紀の読者からすれば、いささか拍子抜けする結末であると言わざるを得ない。ただ、この結末の部分をもう少し深く読むことは許されるのではないだろうか。「苗木畑（Baumschule）」は文字通りの「樹木の学校」のイメージで描写されている。「行儀よく並んで、何千という、高さ３、４インチにも届かぬちっぽけなモミ、トウヒ、エゾマツ、カラマツの苗が植えられていて、それらは浅緑色の小さな頭をもたげていて、たくさんの幼稚園の式典の集まりに似ていた。それから膝の高さぐらいの、さらには胸の高さぐらいの苗木のいくつもの隊列が、健気な少年たちの学校のように立ち並んでいた。」[25] こうした育苗と植林は、人類を恥知らずな利己主義や不寛容から解放する人間教育の必要性と重ねあわされているように読むことができるのではないだろうか。

３．宗教

本稿の第１章で触れたように、ユクンドゥスとユスティーネの不和をもたらす大きな要因の一つに信仰の問題があったことは見落とせない。ユスティーネが怒りを爆発させて離別を宣告するきっかけとなったのは、シュヴァーナウの教会での牧師に対する夫の言動であった。ユクンドゥスは無神論者であり、「絶対的な真実愛」[26] を持つ男である。欺瞞と虚偽と誇張がはびこる利己的な商業社会において、正義感と誠実さのゆえに不利な立場に追いやられるユクンドゥスは、牧師との議論においても、場をわきまえることができない。妻と仲違いしてしまうのも、純粋に宗教的な問題というよりもむしろこの絶対的な誠実さのゆえである。

---

[24] SW Bd.1 S. 1025.
[25] Ebenda.
[26] Hermann Wiegmann : Gottfried Kellers Novellen und Erzählungen. Eine Einführung. Würzburg（Königshausen & Neumann）2021, S.57.

ではユスティーネにとって宗教はいかなる意味をもっていたのだろうか。なぜ彼女はシュヴァーナウの牧師のサークルに狂信的に帰依しなければならなかったのだろうか。彼女はシュヴァーナウの牧師の説くことをきちんと理解できていたわけでは決してない。「よくわからない流行の宗教を信奉していて、その観念がはっきりしなかっただけにいっそうそれに熱心に打ち込んでいた」[27] のである。祖母のような「昔ながらの正統派の信仰を持つ」[28] こととは意味が異なる。すなわちユスティーネは決して優れた知性の持ち主ではないが、母親譲りの誇り高い女性であり、グローア家の階級と経済力にふさわしい高尚な教養を身に着けたいという願望、知性と文化の領域において社会的役割を果たしたいという野心をもともと抱いていたのである。それはいささか子供じみたものであり、打ち込むのは必ずしも宗教でなくてもよかったのではないだろうか。

ユスティーネの心の深層には、人間の精神的価値を軽視する成金のグローア家に生まれ育ったがゆえの、教養と文化に対する渇望があったのかもしれない。併し先行研究でも分析されているように[29]、彼女は現実には夫の価値を人間的精神的資質ではなく、経済的成功によってしか測ることができず、それゆえにユクンドゥスとの結婚生活に積極的な意味を見いだせない。夫の言葉よりも牧師の言葉のほうが彼女にとって重みがあった。グローア家の中でユクンドゥスが実業家として失格の烙印を押された後、彼女の信仰は狂信的となっていく。夫婦が暮らす家の調度を整えるのではなく、教会の装飾に献身的に取り組む。すなわち彼女の信仰には夫婦生活の代償という意味があったのである。礼拝参加や教会での集会に熱心になればなるほど、それは夫婦生活を阻害することになり、彼女は生の現実から離反し、いわば幻想の世界に陥ってしまうのである。ところが作品第３章において、夫との別居生活が始まると、「あらためて熱心に牧師ならびに教会の世話をする活動に身を捧げ、さらに活動の幅を世俗のことにも広げていったのである。彼女はありとあらゆる方面の主催者となった。（中略）学校から学校へ、家から家へ、会議から会議へと、常に通りを歩いている彼女の姿が見られた。あらゆる儀式や討議、公開講演や祭典において、彼女は最前列の長椅子に腰かけていた。」[30] 宗教だけにとどまらず、活動を世俗のことにまで広げていったことがきわめて大きな意味を持つのではないだろうか。少しずつではあるが視野を広げ、自分の実家をも教会の牧師をもいくらか相対化して見ることができるようになっていくのである。彼女はこの時期を境にグローア家からの自立を始め、人間的に大きく成長していくようになる。

さて宗教のことに話をもどすことにしよう。シュヴァーナウの牧師は、実はきわめて世俗的な宗教家であったことが判明する。ケラーと同時代のスイスの作家コンラート・フェルディナ

---

[27] SW Bd.1 S. 981.
[28] Ebenda.
[29] Vgl. Loewenich: a.a.O., S.126f.
[30] SW Bd.1 S.1004.

ント・マイアーの作品に多く登場するタイプの聖職者である。牧師として信者を前にして説教壇で神を熱く語りながら、彼は内心において既に久しく神を離反していた。畏怖の念など全く抱くことなしに単なる雄弁家となり、やがて「自分に送られる無思慮な拍手喝采を恥ずかしく思う」[31] ようになった。彼は僧服を脱いで生きていけるように、妻の財産にまで手を出して投機的な資産運用を行い、恐慌のためにそれに失敗して全財産を失ってしまったのであった。作品第３章で牧師は欺瞞の一切合財をユスティーネに告白する。商売の世界において他人を疑うことを知らず、軽々と騙されてしまうユクンドゥスを無能と見なしたユスティーネであるが、彼女もまたこの牧師の本性を見抜くことが出来ず、いとも簡単に欺かれ続けていたのである。

恐慌によって実家の事業の経営危機を経験したユスティーネは、こうして教会をも失うことになったわけであるが、この２つの喪失は彼女の人生にとっての解放を意味する出来事であった。自尊心から解放された彼女はカトリックの巡礼の老婆に心を動かされ、さらに「極貧の境遇にありながら、完全な満足と心の平和を享受していた」[32] 労働者階級の未亡人ウルズラーとその娘アガートヒェンを訪問するに至る。旧知である彼女たちの信仰と平安の秘密を探究するためであった。併しながらこの母娘に再会しても、ユスティーネは彼女たちが信仰を語る言葉が「早口の無味乾燥な話しぶりで、丸暗記したことを話しているみたいに単調で生彩がなかった」[33] ことから、母娘は「心の平和を彼女たちの教会の教えとはどこか違ったところから得ている」[34] のだと確信する。平安をもたらしてくれるのは権威主義的な教義ではなく、個々人の自由な心の持ち方であることを悟る。こうしてユスティーネは自らの権威主義を反省し、夫の見解をも快く受け入れることができるようになったのである。夫婦の和解の場面で、ハムレットの台詞を引用して「もし宗教というものから人間の姿を引き去ってしまったら、その殿堂は崩壊し、残るのは沈黙だ」[35] と説くユクンドゥスの話が、ユスティーネはすっかり気に入ってしまったのであった。そして自分が夫よりも牧師を信頼してしまっていたことを後悔するのである。

４．グローア家の人々

ユクンドゥスとユスティーネの結婚は自然秩序にかなうものと思われたが、グローア家の人々は二人の結婚を必ずしも祝福していたわけではなかった。作品の第１章と第２章で詳述されているように、グローア家はもともと自作農であったが、ユスティーネの両親が30年以上前から絹織物工業を営んで成功し、事業を拡大していた。努力と才覚によって成功した実業家と

---

[31] SW Bd.1 S.1009.
[32] SW Bd.1 S.1012.
[33] SW Bd.1 S.1020.
[34] SW Bd.1 S.1021.
[35] SW Bd.1 S.1026.

しての矜持が、しばしば資産の乏しい他者を軽蔑する傲慢さにつながる傾向があった。合唱祭で優勝したゼルトヴィーラ合唱団の旗手として、ユクンドゥス・マイエンタールがはじめてグローア家に招かれたとき、表面的には丁重で愛想のよい挨拶を受けたものの、グローア家の人々の態度に見下したような冷たさを感じずにはいなかったのであった。特に別れ際に、グローア家の男たちが3人ともマイエンタールという苗字をそれぞれタールマイアー、マイエンベルク、マイアーハイムと間違えるのである。ユクンドゥスのことを軽んじていたことがはっきりと見て取れる一場面である。ユクンドゥスとユスティーネの相思相愛が確認された段階でも、貧乏人の多いゼルトヴィーラの住民に対するゲルトルート・グローア夫人の偏見は決定的に強く、二人の結婚を是が非でも阻止しようとする。結婚は実現するものの、こうした傲慢さや偏見は解消することはなく、しばしばユクンドゥスに対する誤解や不寛容につながっていくのであった。

グローア家の人々は、山の上で生活する祖父母を除いて、ユクンドゥスを無能と見なした。ユクンドゥスを欺いた労働者や取引業者、そしてゼルトヴィーラの同業者たちも同様である。たしかにユクンドゥスには軽信という短所があり、営利至上主義の時代の企業経営者としての才覚には恵まれていなかったと言えるだろうが、作品第3章の序盤に描かれているとおり、州の首都に出た後、軍隊時代の元上官が経営する企業で給与生活者となって成功している。この元上官は「信頼できる落ち着いた人」「自分の職責を手早く、几帳面に果たし、右顧左眄せず、それでいて用心深さは失わず、とりわけ自分で投機をやらない人」[36] を求めていたのである。この元上官のもとでは、彼は商売上有能であることが証明され、高い地位と豊かな収入を得るに至るのである。また拝金主義的な新しい規範が支配的となる以前のゼルトヴィーラにおいては、ユクンドゥスは地元出身の堅実な材木商として、信頼をあつめて成功をおさめていたのであり、グローア家の人々による否定的評価は一面的であると言わざるを得ない。

併しながら人間の精神的価値を軽視し、利潤の追求に至高の価値を置くことは、この時代の社会の一般的な傾向として描写されている。シュヴァーナウの牧師が投機的な資産運用を始め、転職を志すというのはきわめて象徴的な出来事である。ユクンドゥスの母親であるマイエンタール夫人にも注目する必要があるだろう。彼女もまた成金的な価値観と無縁ではない。すなわち息子の結婚に際して、倫理的価値観の一致などよりも、息子の社会的地位と経済的安定を重視しているのである。「息子に利口な結婚をさせたことで、彼女は貧乏から永久に逃れることができたと信じたのだった。というのも彼女は貧乏を研ぎ澄まされた剣のように恐れていたのである。」[37] 決してグローア家だけが際立っていたわけではなく、むしろ元上官のような実業家のほうが例外的な存在として位置づけられている。

---

[36] SW Bd.1 S.996.
[37] SW Bd.1 S.977.

ユスティーネとユクンドゥスの恋愛は「笑い」による結びつきである。それは自然秩序にかなうものであり、性的な魅力による結びつきを意味するが、それだけではなく、ユスティーネはユクンドゥスの誠実な人柄を信頼して結婚する。併しユスティーネは生まれ育ったグローア家の価値観から自由になれず、欺かれて事業に失敗する夫を見限ってしまうのである。本稿の最終章では、ここまで論じてきたことをもとに、このユスティーネを中心に据えた物語として、作品を捉え直すことを試みたい。

５．ユスティーネの解放の物語

本作品の主人公はユクンドゥスとユスティーネの二人であり、両者の比重はほぼ等しくなっている。本稿第１章で辿ったように、結婚した二人の笑いが失われ、一時的な離別を経験するが、二人とも試練を経験する中で、互いに相手に対する信頼を回復し、真の意味での夫婦へと成長していく物語である。併しながら、ユスティーネを中心に据えて作品を捉え直すことも可能なのではないだろうか。

ユスティーネは実業家として躍進するグローア家に生まれ育ったのであるが、自立心を全く持たなかったわけでは決してない。本稿第３章で述べたように、シュヴァーナウの牧師の新興宗教サークルに帰依したのも、グローア家に欠けているものを外部に求めた結果という面がある。ユクンドゥスとの結婚もまた、グローア家の内部に懐疑的な見方が残っていることを認識した上での選択であり、グローア家からの自立の契機となるはずであった。それにもかかわらず、ユスティーネは貧乏人を軽蔑するグローア家の価値観からは抜け出すことができず、結局のところ夫の価値をグローア家の物差しで測ってしまうことになるのである。森林の乱伐に加担していることを恥じる夫に対し、ユスティーネは利潤を優先する道を奨めるのである。併し夫との別居生活が続く中で、漠然とした形ではあるものの、グローア家の人々にない資質を持つ夫に惹かれる気持ちがよみがえってくるのであった。

決定的な転機となるのは、経済恐慌によるグローア家の事業の経営危機である。ゲルトルート・グローア夫人は破産寸前の状況にあって、女の財産として資産の相当部分を要求し、男たちに対して債権者と話をつけるようにと無理難題を押しつける。結局ゲルトルートは、山の上の百姓屋敷に住む姑から激しい叱責を受けることになる。投機ではなく倹約によって資産を形成していた堅実な舅姑が自分たちの貯蓄を提供したことで、グローア家はかろうじて破産を免れるのであった。母親の醜い面を目の当たりにし、実家に寄生する生き方に幻滅を感じたユスティーネは、グローア家を離れて、ユクンドゥスのいる首都で教師の職につく決心をする。グローア家からの解放を決意したユスティーネがまず向かったのはシュヴァーナウの教会であり、就職先の斡旋を求めて牧師を訪問するのであった。併しその牧師も投機的な資産運用に失敗して破産していたのである。教会宗教にも幻滅を感じ、結局彼女が求め続けていた心の平和と精神の豊かさは、彼女が一度見限ったユクンドゥスとの結婚生活にあることを認識するにい

たるのであった。

作品最終章の和解の場面をいま一度確認してみよう。場所はユスティーネの祖父母が暮らす山の上である。そもそも夫婦生活の不協和音の始まりは森林の乱伐であったが、今や森の中には苗木畑が広がり、将来の世代のために育苗と植林が行われており、その光景に二人は目を楽しませている。宗教と教会についても、ユスティーネは今やユクンドゥスの言葉に完全に満足している。かつてグローア家に損失をもたらしたユクンドゥスに向かって怒りにまかせて発したのと同じ「ろくでなし（Lumpazi）！」[38] という言葉を、ユスティーネは笑いながら口にして和解の言葉とするのである。祖父母の住居には、グローア家の家族全員が和解の宴に招待されている。恐慌による経営危機をのりこえて、ゲルトルート・グローア夫人が再び経営の舵を握っている様子である。グローア家の利益至上主義に変化があったかどうかについては語られていないが、ユスティーネはグローア家を完全に離れて、夫ユクンドゥスの住む都市に引っ越すのである。

『失われた笑い』は経済、宗教、環境といった19世紀後半の社会が抱えていた問題を映し出し、社会小説的色彩を帯びつつ、グローア家ならびに社会に支配的な利益至上主義的な価値観から解放される女性の物語として読むことが可能である。それは幸せな夫婦生活を帰結としている点で、フェミニズム的な意味での女性の自立とは異なっているが、かといって夫への完全な従属を意味するわけでもない。宗教活動を踏み台としつつ、倫理的価値と寛容の精神、普遍的人間愛の方向への個人の解放である。ユクンドゥスも別居時代の試練の中で社会経験を積み、軽信の傾向が消え、商売においても成功するようになっており、夫婦そろってのハッピーエンドの物語ということになる。ただ社会小説的な観点から見ると、結局のところ時代の病ともいうべき諸々の問題の根本的な解決には至っておらず、決してハッピーエンドと呼ぶことができないことにも留意しておく必要はあるだろう。

---

[38] SW Bd.1 S.1026.

Über Gottfried Kellers Novelle *Das verlorene Lachen*

Eiichi TANIGUCHI

Gottfried Kellers Novelle *Das verlorene Lachen* reflektiert die gesellschaftlichen Verhältnisse in den 60er Jahren des 19. Jahrhunderts, indem sie aktuelle soziale Probleme der damaligen Zeit - politische, wirtschaftliche, religiöse und ökologische - behandelt. Hier handelt es sich natürlich um scharfe Kritiken an dem Kommerzialismus als Zeitkrankheit. Diese Novelle kann jedoch auch als Geschichte einer Frau gelesen werden, die sich von den fesselnden kaufmännischen Wertvorstellungen und Normen des Elternhauses befreit hat. Allerdings sind diese Normen mit dem Kommerzialismus fest verbunden.

Die Familie Glor hält wirtschaftlichen Erfolg für wichtiger als Kultur und Ethik. Justine hätte sich durch die Heirat mit Jukundus von den Wertvorstellungen ihrer Eltern und Brüder frei machen können, aber sie blieb in Wirklichkeit nach wie vor bei den Wertmaßstäben ihrer Familie und unterschätzte deswegen den ehrlichen Jukundus. Bewusst oder unbewusst scheint Justine jedoch von Anfang an gewisse Sehnsucht nach dem Geistigen und Kulturellen, was der Familie Glor fehlte, gehabt zu haben. Nachdem Jukundus sie verlassen hat, beschäftigt sie sich nicht nur mit der Religion, sondern auch mit verschiedenen weltlichen Dingen. Dadurch erweitert sich allmählich ihr Gesichtskreis, und sie möchte jetzt gern Jukundus aufsuchen und ihr Unrecht gutmachen. Da bricht über die ganze Geschäftswelt eine wirtschaftliche Krise herein, und das Glorsche Haus wird beinahe vernichtet. Justine entschließt sich, von der Familie Glor unabhängig zu werden und in der Hauptstadt mit Jukundus zusammenzuleben. Die ethische Entwicklung zur Toleranz und Humanität bringt der Geschichte des Ehepaars ein Happyend, während die sozialen Probleme der Zeit noch lange keine völlige Lösung gefunden haben.